

# 梅崎春生の笑い

— 生の肯定へ —

綾目広治

## 一 市井物の中の笑い

「桜島」(一九四六年九月)によって戦後派作家として注目された梅崎春生は、その後も「日の果て」(一九四七年九月)や「B島風物詩」(一九四八年一〇月)などの戦争物の小説を発表していたが、一九五〇年代前半からはそれらの戦争物よりも市井物の小説が増えてくる。そのことに関して梅崎恵津は、『幻化の人・梅崎春生』(東邦出版、一九七五年八月)の中で、梅崎春生がNHKラヂオで語った話を紹介している。それによると、「桜島」だけは体験であるが、そのあと直ぐ書きはじめた戦争物は作りものなので、自分は嘘を書いているという気がして来た。「そこで、日常の生活に戻した。戦後の混乱等を書いた。この方が性にあっていし資質的にもそういう作家だと思った」と、梅崎春生は語ったそうである。梅崎文学における笑いは、この「戦後の混乱」の中にある「日常生活」に題材を取った短編小説に登場してくるのである。

たとえば、「山名の場合」(一九五一年一月)である。これは、「夜間の学校」に勤めている二人の教師の話である。山名申吉は国語教師

で五味司郎太は社会科の教師であるが、二人は共に三十一歳の独身である。もともと作家志望ではなかった山名が、「自分というものをハッキリさせるために小説というものを書いてみようかなという気持ち」を持ったところから物語は動き始める。そこで山名は「先ず手慣らしに、自分の身边に題材を求めること」にして、教員室では隣りで夜間学校に赴任した時もほぼ同じである五味司郎太のことを書くこととする。

実は、山名にとって、「他人に関心を持つ」というのは、淡い憎悪を抱き始めるといふことでした」と語られているように、山名には「憎悪」によってでしか他人と関係しないという傾向があつて、自分自身もそのことを自覚していた。それでは五味は、「何でもつて他人にながつているのだろうか？」という疑問が山名に湧いて来たのだが、五味は「どうもつながつていないらしい」と山名には思え、そうなる今度は「自尊心」が傷つけられたような気持にもなる。山名の五味への関心の深まりは、小説の題材のためということもあつたわけだが、それとともにこのように「五味を憎み始めた」からでもあつた。後でも触れるが、「憎悪」によってでしか他人と「つながつ」ることができ

ないという問題は、梅崎文学の中心テーマの一つであった。

さて、それ以後の山名は五味を小説の題材として観察しつつ、他方では五味に「厭がらせ」もしようとするのである。下宿で鼠に悩まされていた山名は、鼠を捕獲してそれを五味の家に放ったり、またデパートで五味を偶然見つけた山名は、五味がベレー帽に関心を持っているのを見て取り、自分でそのベレー帽を買って五味に見つからないように彼の買物袋に入れたりする。無意識のうちに万引きしてしまったのかと五味に思わせて、動揺させることを狙ったわけである。しかし、それらの作戦は悉く不成功に終る。鼠については、五味は「久しぶりに旨かつた」と言う。彼は南方での兵役中に、鼠を食べ慣れていたのである。また五味はベレー帽を被って平気な顔で学校に出勤もする。山名が驚いて訊ねると、五味は買物から戻ると自分の荷物に紛れ込んでいたと言う。山名が「へんな話だね」と言うと、五味は「へんでもないよ。誰かが間違えたんだらう」と、「変哲もなく言い」、五味は全く動揺していないのである。

このように、五味の狙いが肩透かしを食わせられるところに、この小説における笑いが生まれるのであるが、それ以上に読者は山名の馬鹿げたとしか言いようのない「情熱」のあり方におかしさを感じ取るであろう。小説では山名のその「情熱」について、次のように語られている。「生れて以来あてもなくぼんやりと生きて来て、情熱などというものには自分は縁がないと思込んでいたのに、三十一歳の今になって、とつぜんこんな情熱が沸き立ってきた。しかもその情熱が、五味司郎太という個人への厭がらせ、その一点だけに燃え上っている」と。もつとも、「そう気がつくくと、山名はなんだか妙な感じがし

ないでもありませんでした」と語られていて、山名自身もその「情熱」の愚かさに気がついていなくもないのである。

梅崎文学における笑いの多くは、このように馬鹿げたとしか言いようのないことに一生懸命になってしまふ、その人間の愚かさが描かれることによって生まれるものであると言える。同様の「情熱」の様が描かれているのが、「Sの背中」（一九五二年一月）である。蟹江四郎の二度目の妻である久美子は結婚して一年半ほどで風邪をこじらせて肺炎で死んだのだが、遺品の『かりそめ日記・蟹江久美子』に、「私はSを愛している」、「わたしはSの背中が好きだ。（略）その背中のまんなかあたりに、小さな痣がある。直径は一センチメートル位かしら。そこに縮れた毛が三本生えている」という記述があることを、蟹江四郎は発見する。蟹江四郎は、「S」とは自分の友人でもある猿沢佐介のことではないかと思ひ出す。「第一猿沢佐介という名前は、その発音の響きからしても、Sのかたまりみたいな名前だ。まったくS的な名前ではないか」と。

その疑惑が湧いてからは、蟹江四郎は確証を得るために何とか猿沢佐介の背中を見ようとする。ある土曜日に猿沢の家に御馳走に招かれて行ったときには、蟹江は猿沢の背中に痣があるかどうかについて猿沢夫婦に鎌をかけた話をしてみたりするのだが、どちらからもそれについての証言を得ることはできなかった。その後、語り手はこう述べている。「この夜あたりをさかいとして、蟹江の生きている情熱は、はっきりとひとつの形の目標にそがれるようになったようです。つまり、猿沢の背中に痣があるかないか、その一点なのでした」と。やはり、ここでも愚かだと言える「一点」の事柄に情熱を傾ける人物

が登場して、読者の笑いを誘うのである。また、関谷一郎が「(笑い)の系譜——井伏・太宰・梅崎・安岡——」(『笑い』と創造 第五集)(ハワード・ピベット・文学と笑い研究会編、勉誠出版、二〇〇八年三月)所収)で指摘しているように、蟹江は「己れの「四郎」も「S」であることに思い及ばぬまま、久美子の日記の「S」を「猿沢」と決めつけ」ているのである。このように自身の考えや思い込みを冷静に批判的に捉え直そうとしない愚かさも、笑えるところであろう。

愚かさが笑いを誘うということでは落語の笑いがそういうものであるが、「Sの背中」には落語にそのまま出てきてもおかしくないような挿話も語られている。蟹江と猿沢が将棋を指したとき、形勢不利と見た猿沢が蟹江に、「君のその桂馬を、三十円で売って呉れないか」と言う。そう言われた蟹江も「びっくりしたよう」なのだが、「よかろう。その代り、現金だよ」と応える。やがて、蟹江の方からも猿沢に桂馬をゆずってくれと言ったときには、猿沢は「ああ、いいだろう。五十円だよ」と応え、「うちじゃそんな値段なんだよ」と言う。そして蟹江は「しぶしぶ五十円出して、桂馬を受取りました」と語られている。将棋の対局で駒の売買をしたりすれば、勝負というものの存立自体が成立しなくなるはずだが、それを平然と行うところはまさに落語的なおかしさである。

語り手は小説の末尾部分で、もう蟹江は猿沢の背中を見ない方がいいのではないかと言ひ、「猿沢の背中に痣があつても、蟹江は不幸になるし、ないとすれば、なおのこと不幸になるに違いありません」と語っている。確かにそうであろう。注意したいのは、語り手あるいは作者が蟹江や猿沢を嘲笑してはいないのであつて、実は私たち読者も

愚かしい「一点」に拘つて生きていることにおいて変わりはない、と言つていと考えられることである。

それはともかく、落語的ということを取り上げるならば、「春日尾行」(一九五三年五月)は話の構造そのものが落語的であると言ふことができる。この小説には、梅崎春生のユーモラスな短編小説にはよく登場する、語り手の「僕」よりも年少である画家の友人が出てきて、その友人が自身の体験談を語るのである。画家の友人が酔つて置き忘れた高価な腕時計を四、五日「重宝して使つて」いたところ、画家は日曜の朝起きて顔を洗おうとして腕に時計をしていることに気づき、それを外したところまでは覚えていたのだが、気が付くと腕からその腕時計を紛失してしまつたのである。彼が顔を洗つているときに、ちようど「同じ家に間借りしている」二十歳前後の駒井嬢も洗濯をしていたことから、画家は洗面所に置いた腕時計を駒井嬢が盗んだのではないかと「嫌疑」をかけ、彼女が腕時計を「どこか古物商にでも売りに行くんじゃないかな?」と思つて、彼女を尾行するのである。しかし駒井嬢に尾行を気づかれてしまい、さらにはパチンコ屋に入った彼女を店内で見失つてしまふのである。

少々常軌を逸していると言へるのは、駒井嬢を見失つた後、パチンコ屋で隣りにいた「三等重役的タイプ」の男の、「てらてらした額に、汗の玉が五つ六つふき上つていゝ」顔を見たたん、「急にこの男がすこし憎らしくなつて来」て、「駒井嬢のかわりに、今日一日、この男のあとをつけ廻してやろうか!」と思ひ、実際にその男の後ろを尾行することである。男は女性と待ち合わせをしていて、二人で映画館に入り、その次には遊園地にも行くのだが、画家はその後も尾行するの

である。それについて画家は、「バカだつてことは、その時も百も承知です。(略)でも人間には、気持の行きがかりつてもものが、確かにあるんですよ。(略)バカをやらぬ人間があつたら、お目にかかりたいですねえ」と語っている。また、「もうこうなれば意地でしたな」とも語る。

結局、画家は腕時計が今自分が着ている「上衣の内ポケット」に入っていたことに気づくのである。尾行の末のこの(落ち)が落語的なわけだが、「山名の場合」や「Sの背中」と同様に「春日尾行」においても見られる、言わば人生の大局から見れば下らないとしか言いようのないことに「情熱」を燃やす愚かさ、あるいは「意地」になって拘る愚かさを、梅崎春生は多くの小説に描いたと言える。しかし先にも触れたように梅崎春生はその愚かさを嘲笑したり冷笑したりはしていないのである。幾分かは嘲笑的な場合でもそれは自嘲を含んだ笑いと言え、他者を高所から見下ろしたような蔑笑ではない。次に、その笑いの特質についてさらに考えてみたい。

## 二 笑いの特質

梅崎文学における笑いの表現について、それらが「空虚な笑い」や「嗜虐的な笑い」、さらには「笑いそのものに積極的に焦点を当てる」ような笑いなどがあることを詳細に分類した論考に、和田勉の『梅崎春生の文学』(桜楓社、一九八六年十一月)に収められている「笑いの表現について」がある。和田勉は、先に見た「山名の場合」「Sの背中」やまた「ボロ屋の春秋」について、これらの小説は愚かしい人間

を笑いによって批判、否定しようとしているのではなく、「実は人間とは、所詮こういうものだ」という気持をもって描いており、嘲笑・蔑笑などを含んだ苦笑・憫笑である」と述べている。とくにこれら三作に限定して言っているのではなく、また言い方も異なるが、やはり梅崎文学の笑いが高所に立ったところからの冷笑や蔑笑ではないことを語っているのが、柳澤通博の『梅崎春生 ユーモアと「幻」』(木鶏社、二〇一一年五月)である。柳澤通博はその中で、「梅崎は常に社会的弱者である人間の実在を低声で語ったのだが、そこで吐かれた自嘲や嘆息はいつか自ら彼独自のペーソスやアイロニーをはぐくみ、やがてわが国の文学としてはきわめて異例なユーモアの世界を形成したのである」と述べている。

もちろん、「山名の場合」と「ボロ屋の春秋」の二つの小説に関して言えば、戸塚麻子が『戦後派作家 梅崎春生』(論創社、二〇一一年七月)で述べているように、「山名の場合」では「カタルシスを得ることが描かれた」のに対して、「ボロ屋の春秋」ではそれが無いという相違があり、さらに「山名の場合」と違って「ボロ屋の春秋」には、単に野呂旅人と「僕」との間にある単純な対立だけでなく、そこに二人に詐欺を働いた不破数馬や、結局はその「ボロ屋」を差し押さえた中国料理店の経営者の陳根頑が絡んでいて、対立は複雑な様相を呈しているのである。別言すれば対立は、個人間の次元に収まらない、言わば社会的な背景があるものとしても示唆的に描かれていると言え

る。その複雑な対立のあり様は、『砂時計』(一九五四年八月〜一九五五年七月)や『つむじ風』(一九五六年三月〜一月)で描かれること

になる。そうなるとその物語の世界は喜劇的世界というよりも、見方によっては残酷劇の様相を帯びた世界に見えてくると言うこともできなくはない。とくに『砂時計』がそうであって、この物語は修羅印カレー粉工場周辺、夕陽養老院、そして白川研究所というブラックジャーナリズムの会社を舞台にして展開していて、カレー粉工場は地域の住民に公害を撒き散らしている会社であり、夕陽養老院は入院老人の回転を良くして「入院料十万円の間断なき流入」を図るために、食事に肝臓をおかす黄変米を混ぜたり、老人が滑って事故死するように風呂をタイル張りしたりして計画的な殺人を行おうとしている。白川研究所は人間たちの弱みにつけ込み、強請りを主な収入源とするような組織なのである。

しかし、それらの組織の人間は悪辣さが際立つようには描かれておらず、むしろ滑稽さがあるものとして描かれていて、ここも少し笑えるところである。たとえば夕陽養老院の経営者の院長は、老人たちが待遇改善を要求すると、「今どきの老人は全くなっておらん。義務のことは忘れて、権利ばかり主張する。なんと嘆かわしいことか」、と心底思う。自らの悪巧みは棚に上げて（正論）の立場から老人たちを批判しているのだが、その無自覚さぶりは笑えるところだろう。また、白川研究所は事務所の黒板に「この世に弱みなき人間はなし 相手のすべての退路を断て」という標語を掲げているのだが、これはこの研究所が強請りや集り（たぐ）を本業としている組織であることを公然と明らかにしているわけであって、このあたりも悪は悪であることに変わりはないものの、幾分滑稽に描かれていると言えよう。あるいは、悪も笑われていると言えよう。

と言つて、梅崎春生が笑いながら悪を許容していたのではない。たとえば彼が、悪とりわけ権力の悪に対しては憎悪さえ持っていたことは、戦争物の小説やメーデー事件のルポルタージュともいえるエッセイ「私はみた」（一九五二年七月）や「警官隊について」（一九五二年七月）などから窺われる。また、「天皇制などというものは、習慣に過ぎず、それもぐうたらな習慣に過ぎない」（天皇制について）一九五三年八月）と述べているように、梅崎春生は日本の社会体制に対しても厳しい批判の眼を持っていたと考えられる。梅崎春生は社会の悪を決して許してはいなかった。彼の兵役体験がそれを許さなかったであろう。

しかし、そうではあるのだが、そのような社会体制なり権力なりを作ってしまう人間存在の愚かさや弱さについては、やはり梅崎春生は笑いながら肯定するところがあったのではないかと思われる。したがって梅崎文学における笑いは、蔑笑や冷笑ではなく、ましてや相手を笑殺するような笑いなのではない。あるいは、人々が縛られている通常の規範や論理則から彼らを解放して、それまでは見えなかつた新たな世界を提示するきっかけを齎すときに起るような笑い、すなわち発見や認識の笑いというものでもないのである。それは、或る諦念を持ちながらも人間の愚かさを憫笑して、そしてそれを肯定するような笑いであると言えよう。

もちろん、その笑いには『人も歩けば』（一九五九年八月刊）に見られるように社会諷刺が含まれている場合もあるが、やはり基本は人間の愚かさや弱さへの共感に基いているのである。井上宏は『笑い学のすすめ』（世界思想社、二〇〇四年七月）の中で、昔話には人の欠

随や失敗が語られていて面白いが、それは「別に優越感から笑うわけではなく、人間の弱さへの共感から笑ってしまふ」と述べている。「弱さ」だけでなく愚かさも含めれば、この指摘はそのまま梅崎文学の笑いの説明にもなるであろう。さらに言えば、西村清和と松枝到の共著である『笑う人間／笑いの現在』（ポラ文化研究所、一九九四年一月）では、「こどもの産声が「泣き」であるのは、悲惨と矛盾に満ちた世界にほうり込まれたことを悲しんでいるからだ、というジョークがあるが、となれば幼児の「笑い」は、そんな世界で生きることを決意したしるしなのだろうか」（傍点・原文）と語られているが、梅崎文学の笑いもそういう笑いであると言えよう。「悲惨や矛盾」を受け止めつつ、その中でも生きていこうとすることを肯定しようとする笑いなのである。

もつとも、「悲惨や矛盾」の意識が強くなると、先に触れたように梅崎春生には「憎悪」によってでしか他人と「つながる」ことができないう認識や、「人間と人間とを結び合うものは、愛などというしやらくさいものではなく、もっぱらこのオセツカイとか出しやばり精神ではないでしょうか」（「ボロ屋の春秋」という認識もあって、実際にもこれらが人間関係についての梅崎春生の根本認識であったと考えられる。しかしながら、そういうペンミスティックな認識を持ちながらも、笑いを言わば緩衝装置にすることによって、人生を肯定的に受け止めようとする姿勢を持つとしたのではないだろうか。その姿勢は遺作「幻化」（一九六五年六月・八月）に見ることができ。

小林秀雄は新潮社版『梅崎春生全集』の内容見本（一九六六年一月）の中で、近頃読んだ小説で「幻化」に「一番感心した」と述べ、

「私小説の手法とは異なつて、自身の異常な心理を道具として扱ひ、独特のユーモア小説を創らんとした作者の企図は成功したと思ふ」と述べている。「幻化」に「独特のユーモア」があることを見抜いたのはさすがに慧眼だと言えるが、しかし何の留保も付けずに「幻化」を「ユーモア小説」だと言いつつたのは、戦争に何ら傷つくことがなかったと言つていい小林秀雄らしい発言である。「幻化」には、辛かった兵役体験から解放されたときの喜びを反芻することで、生きる意欲を回復しようとした梅崎春生の切実な願いが語られていたのである。その切実さにも言及するべきである。たしかに見方によれば、主人公五郎の対人関係のあり方はユーモラスであるが、しかし「幻化」ではその面よりも願いの切実さの方が前面に出てきているのである。したがって、妻子を交通事故で失つた丹尾の悲しみを五郎にも重ねて読まなければならない。だからこそ、最後の場面で阿蘇の火口の周りを歩く丹尾に、五郎は「元気出して歩け、しっかり歩け」と心の中で声援を送るのである。それまでの梅崎文学の笑いや、そして「幻化」の中に伏在しているユーモアも、最終的には丹尾を応援し生を肯定する五郎のこの言葉に向うものであつたと言えよう。

〔附記〕本稿は「国文学 解釈と鑑賞（特集 日本の近代文学と笑い）」（二〇一一年一月号）用に書かれたものであるが、周知のように同誌が二〇一一年一月号をもって休刊となつたため、事務局に相談し、本稿を「近代文学 試論」に掲載していただくことになった。本誌の論文としては本稿の枚数が二〇枚と少ないのは、以上のような経緯による。了承していただきたい。

（あやめ ひろはる、ノートルダム清心女子大学）